

平成 29 年(2017 年) 1 月 12 日
SNW 米山潔

アンケートまとめ報告 「学生とシニアとの対話 in 福島高専」(案)

日時： 平成 29 年(2017 年) 1 月 12 日 (木) 13:00~17:30

場所： 福島高専 図書館 3 階視聴覚教室

参加学生： 41 名か 42 名 (予定 43 名うち機械工学科 14 名、電気工学科 2 名、物質工学科 2 名、建設環境工学科 2 名、コミ情報学科 23 名)

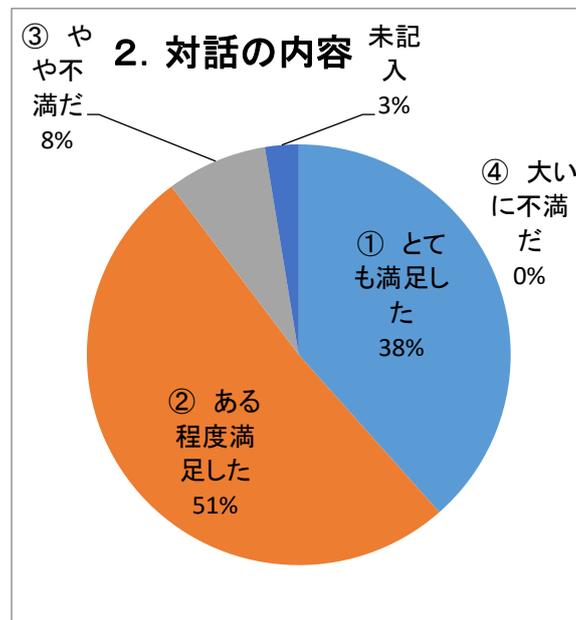
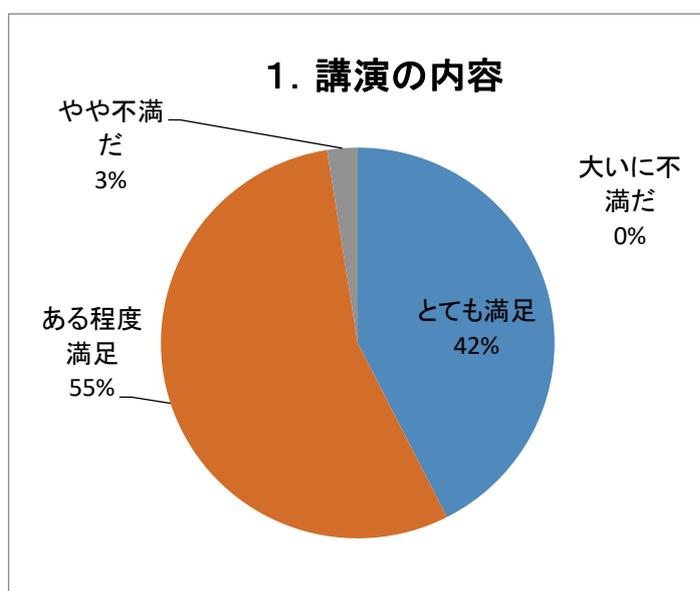
I. アンケート回答

学生母集団

・回答 40 名

出席 41 名とすると 回答率 98%

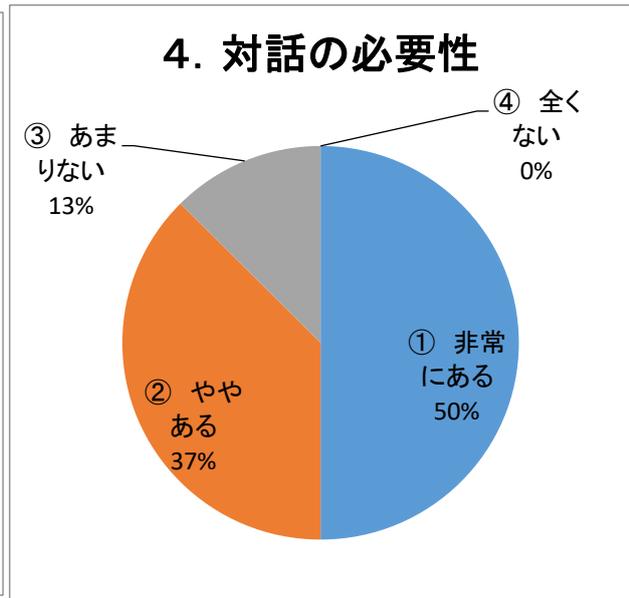
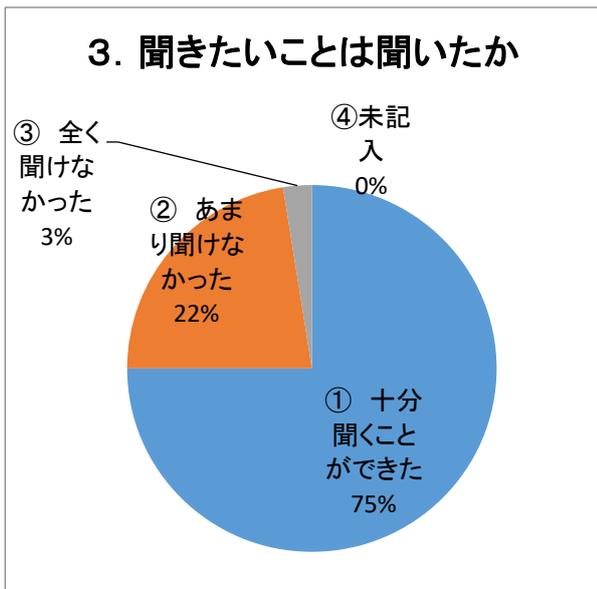
・講演の内容については、「とても満足」と「ある程度満足」を合わせて 98% であり、「やや不満だ」の理由も「専門知識の不足」というもので好評だった。



II. アンケート結果

1. 対話の内容は満足いくものでしたか？

十分満足およびある程度満足の回答が合計 89% で対話の効果が確認できた。理由は「新しい情報を得られた」という感謝が圧倒的であった。また、「やや不満だ」と記した者 3 名のうち 2 名に以下の理由が記されていた。「何に向かって対話を進めていくのかははっきりしていなくて、とてもやりづらかった。」と「学生があまり話せなかった。」



2. 事前に聞きたいと思っていたことは聞けましたか？

校内で事前に準備された様子はいかがでなかったが、75%が満足している。ここには、記入欄が何故か無いので、原因を究明できない。

3. 今回の対話で得られたことは何ですか？

3名が個々に記載してくれた。

「原子力の知識、安全性」が11名あった。その他を以下に記す。

「温暖化や原発の知識が得られた。」

「正しい知識（偏見からの離脱）。」

「原子力の有効性。」

「様々な知識→日本の現状。世界の現状。日本と世界の違い。今後どのようになっていくか。」

「他国との理解の違い。」

「日本と世界の原子力に対する考えの違い。」

「日本人が原発に対しての知識の低さが分かった。」

「日本の深刻な問題。」

「まとめることの難しさと原発の安全性。」

「原子力について、地球温暖化について、現在の電力供給の現状」

「実際に原子炉というテーマに接せられている方に意見やお話を聞くことができとてもためになった。」

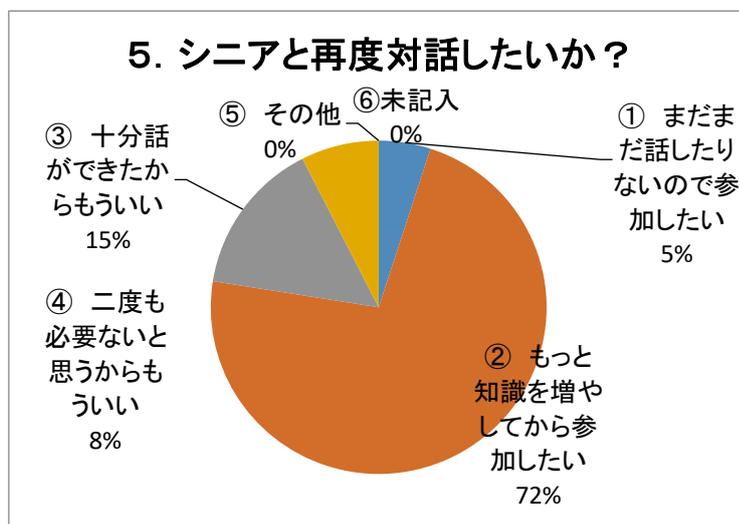
「ご年配の方とこういった内容の話をしたことがなかったので、ためになりました。」

「今までに知らなかった福島原発の事故の話。」

- 「マイナスの報道だけでなく、プラスの報道にも耳を傾ける。」
- 「リスクと利益のバランスを考えた方がいい。」
- 「原発がマイナスだけでないこと。」
- 「自分の考えの答え。」
- 「原子力に限らず、多方面での理解が必要であると感じた。」
- 「疑問を持ち、知識を手に入れて進めて行くことの大切さ。」
- 「物事を良く調べて知るべき。」
- 「チームワーク。」

4. 「学生とシニアとの対話」の必要性についてどのように感じますか？

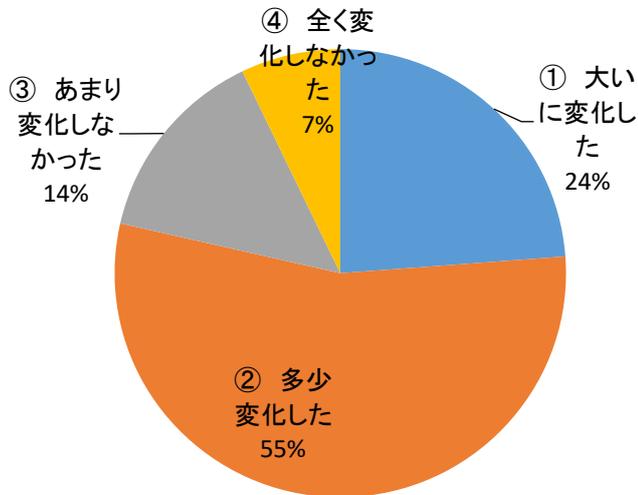
対話の必要性が非常にある、およびややあるとの回答は計87%あり、シニアからの現場の声や黎明期から実業を推進してきたパワーは若い学生にとっても刺激になっている。シニアとの対話は大学と原子力に係わる社会との接点になる。



5. 今後、機会があれば再度シニアとの対話に参加したいと思いますか？

「もっと知識を増やしてから参加したい」と「十分話ができたらもういい」で77%あり学生には刺激になったと思われる。「もっと知識をつけた状態で対話できればよかった」という意見は重い。これは学生にとっても永遠の課題であり、今後とも一層勉学や研究に励んで頂きたいが、現時点の対話を通してそこから飛躍して頂きたいので何ら問題ではない。反省材料としてシニア側からも魅力ある提案と対処が必要となる。また設問は単純に有意義か必要性を感じないかの設問でもいいと思う。

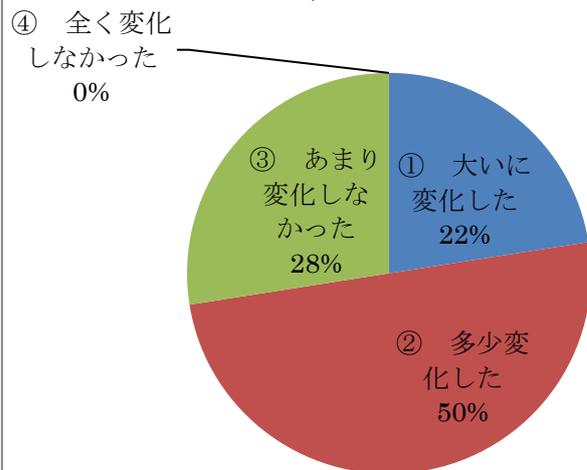
6. エネルギー危機認識の変化



6. エネルギー危機に対する認識に変化はありましたか？

エネルギーや環境問題の必要性である。「大いに変化した」「多少変化した」を合わせて79%と高い。シニアとの対話の重要性を再認識できる。

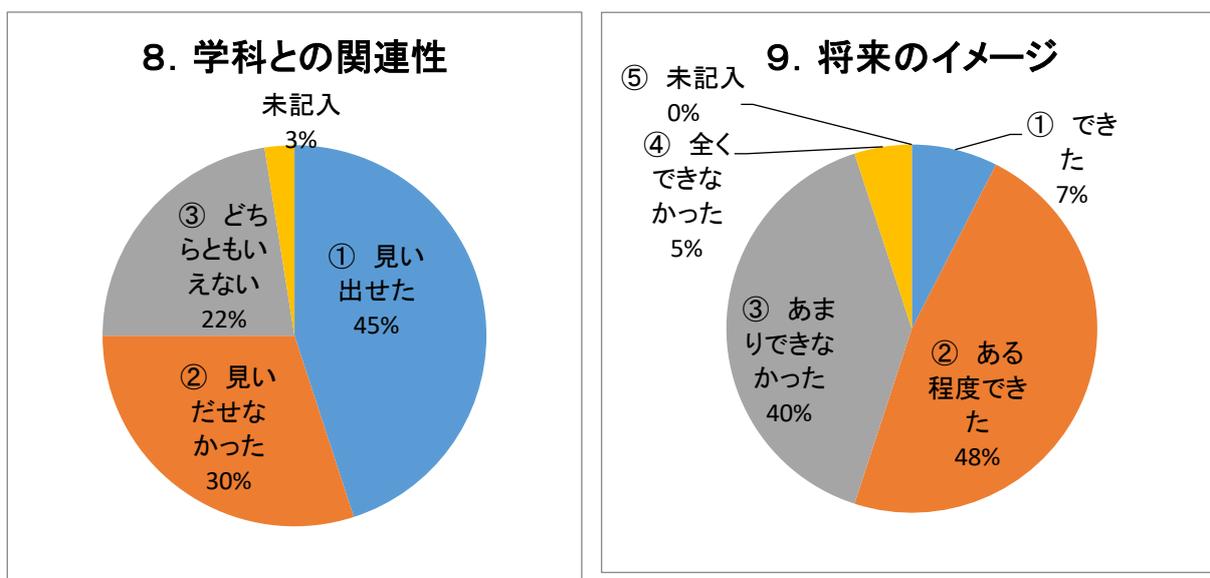
7. 原子力のイメージ変化



7. 原子力に対するイメージに変化はありましたか？

「大きく変化した」と「多少変化した」を合わせると72%であった。対話会

が役立つといえよう。



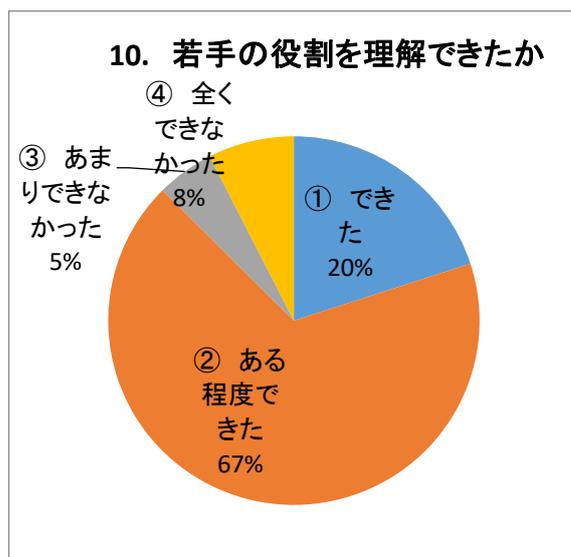
8. 今回の対話で自分の学科との関連性を見出すことができましたか？

技術系 46%、事務系（コミ情報学科） 54%の構成である。「学科との関連性」を見出したのが 45%と低いのも頷ける。

設問が大学の「原子力学科」を対象としていると考える。設問自身に無理があったと思う。

9. 対話の内容から将来のイメージができましたか？

前問と同じで、「将来のイメージ」と関連付けられた者が 48%というのも頷ける。設問を再考したい。



10. 対話の中でシニアが思う若手の役割を理解できましたか？

「できた。」と「ある程度できた。」を合わせると、87%と高い。対話を通じてシニアの期待が若者に通じた証と考える。高く評価したい。

11. 自分が思っていた若手の役割とシニアの考えは違いましたか？どのような違いがありましたか？また、シニアの考えを聞くことで、自分の考えに変化がありましたか？

18名から自由記載があった。目新しく否定的な記載事項を以下に記す。

「若手のことについての話をほとんどしていない。」

「考えの違いがよく分からなかった。」

「そういった類の対話があまりなかった。」

「SNSでアピールするという考え。マイナスにとらえられることもあるので、あまりやらない方が良く考えていた。」

12. 本企画を通して全体の感想・意見など

15名から自由記載があった。特に以下の長文3点を記録したい。

(1)

原発のことをほとんど知らずに今回の対話になってしまったため、対話というより話を聞くことしかできなかったのは残念でした。今回をきっかけに原発関係について調べたり、新聞を読んだりしたいと思います。そして知識を深めて行きたいなと思いました。来年もやるべきと思います。

(2)

SNSについて思うことがありました。震災後SNSは福島への冷たいツイートが多かったのです。津波でみんな死ねばいい、他県に来るな、という信じ難いものもありました。今でも、福島にそのような考えをもっている人は多くいます。そんな状況で、専門的な知識もない私たちがSNSで情報を発信しても、状況が良くなるとは思えません。若いから知っているSNSの怖さを、皆さまにも理解していただきたいです。

(3)

SNSを利用して風評被害を減らす……。これは難しい問題だと思った。福島県という分母が小さい以上、分母の大きい方にのまれてしまうのがSNS。つまり私たちがSNSで情報を書き込んでも、悪意のある第三者がいたずらにかきこめてしまう。そして、逆に風評被害が悪化してしまうケースがありうるのである。ましてや以前、福島というワードをみるだけで、その人をいじめたり、車の窓をわったり、車のタイヤをパンクさせてり等、実害の出ている事もあった。そのため、そのような情報を発信してしまったら、悪化してしまう場合があると思った。2chネルなんて、福島の人にさわると放射線がうつるなんて書きこみもある。

所感

アンケートに記された情報を分析する限りでは、この企画は大成功であった。来年も企画すべきである。これも元はと言えば、福島高専の先生方と参加学生の協力のお蔭であり、厚く御礼を申し上げる。

私は1班に参加すると共に、アンケート整理担当であった。気付いた点を列記する。

- (1) グループ討論の最初は往生した。聞けば、グループ討議に不慣れなのと多くが初対面ということだから無理もない。そこで学生同士の自己紹介から始めて難を逃れた。
- (2) コミ情報科という文科系の学生参加に驚いたシニアが多かった。正直に私も驚いた。しかしアンケートを整理して気づいた。上記のSNS問題提起である。このような指摘は工学系では気付くことはあるまい。文科系という異分子が入る効果は大きい。これに気付かせてくれた、福島高専の鈴木准教授とコミ情報学科に感謝したい。
- (3) 上記のSNS議論で気づいたのであるが、風評被害防止には教宣という安易な形でなく、シニアが学生等に地道なエネルギー・原発技術を継承することと再認識した。

以上